

2 愛の日記

四月二十八日（くもり） ベトナムから来たリヤンちゃんは、きょうもさみしそうにしていた。日本語があまり話せないので声をかけてあげたくても、なかなかできない。わたしももう六年生なのだからすっかりしなくてはと思う。

四月三十日（晴れ） 父が久しぶりに「あした、ホームに行こう。」という。父はなにかうれしいこと、つらいことがあると、ホームに行く。ホームとは、神奈川県大磯町のエリザベスサンダースホームのことだけど、父は二歳のとき、そこに預けられ、青年になるまでそこで育ったのだ。

父の父（わたしのおじいさん）は、アメリカ人で、わたしの知らない人だ。父が生まれたのは戦争の後で、おじいさんは、日本に来ていたアメリカの軍人だった。父の母（わたしのおばあさん）は日本人で、父が持っている古ぼ

けた写真を見ると、わかくてきれいな人だ。

二人は心から愛し合っていたのに、ちがう国の人どうしの結婚は、いろいろと難しかったらしく、とうとう別れることになってしまった。

それから、おばあさんは病気になって、父を育てられなくなり、父をホームに預けると、すぐに亡くなってしまった。だから、父のふるさとは、大磯のエリザベスサンダースホームで、父の新しい母は、このホームをつくられた沢田美喜先生なのだ。

五月一日（晴れ） わたしは、父と連れだって歩くのが好き。今日もうきうきしている。

ホームに着くとすぐ沢田美喜記念館に行った。父はいつも、沢田先生の写真をじっと見つめて話しかける。父は、先生のことを今でも「ママちゃま」とよぶ。

沢田先生のふっくらとした顔、やさしそうなまなざしに向き合っていると、わた

しの心まで、ぼっと明るくなる。

大きな戦争の後で日本が混乱らんしていたとき、父のように、外国の人と結婚ができずに生まれてきて、両親とはなればなれになる子どもたちがたくさんいた。

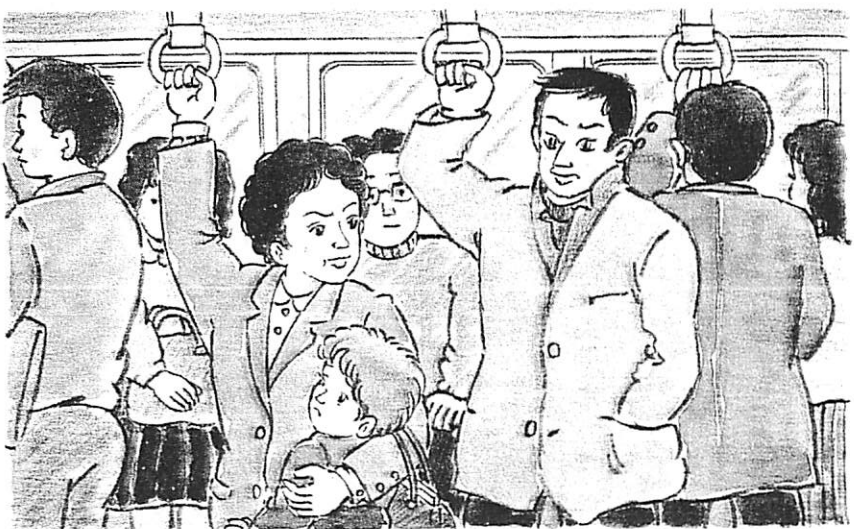
わかひころ、長く海外で生活されていた沢田先生は、そんな子どもたちを見ると、自分の子どものように愛いとおしく思えてしかたがなかった。この子どもたちの母親になってあげることが自分の使命しめいと思ひ、全財産をつぎこんで、昭和二十三年（一九四八年）、このホームを作られたということだ。

五月の緑の日ざしの中で、父が話しかけてきた。

「なあ、愛、お父さんはこの間、愛のクラスの授業参観に行つて、リヤンちゃんを見たとき、小さいころの自分に出会つたような気がしてね。」

「お父さんの小さいころ。」

「うん。お父さんも、ずいぶんといじめられたんだよ。ホームを一步出ると



目の色がちがうとか、かみの毛の色がちがうと言われてね。あるとき、ママちゃまと電車に乗つたんだ。そしたら、後ろからかみの毛を引っぱられて、日本人じゃないからアメリカへ帰れつて、男の人に言われた。」

今まで、一度も聞いたことのない話だつた。

「そのとき、ママちやまがね、顔を真っ赤にして『この子たちに、どんな罪があるんです。日本人でもアメリカ人でも、どこの国の人でも、同じ人間じゃありませんか。』と、言つてくださったんだ。」

父の長いまつ毛に、光るものがあつた。

「お父さんはね。社会に出てからも、苦しいときにはいつもママちやまの言葉を思い出して、がんばったんだ。」

思わず、父の手をにぎった。ずっとずっと父が好きになった。

大磯駅で、父がとつぜん、わたしをふり返った。

「なあ、愛、愛はリヤンちゃんにやさしくしてるんだらう。」

わたしは、ただだまっていた。心がうずいた。

五月七日（雨） 今日も、リヤンちゃんに声をかけられなかった。お父さん、

ごめんね。沢田先生、ごめんなさい。

五月十日（晴れ） 父のアルバムを見る。沢田先生にだかれた小さいころの父を見ていたら、なみだが出てきた。沢田先生は、三十年間に千人以上の子どもたちの母親になられた。いつも、山ほどの苦勞をかかえながら。

父は言った。「ママちやまは、お父さんたちを、みんな同じように愛してくださった。」って。それが、わたしの名前のひみつ。

五月十二日（晴れ） 昭和五十五年（一九八〇年）の今日、沢田先生が亡くなられた。旅先のスペインで。そして今日、わたしはすなおに、リヤンちゃんに声をかけた。「わたしのお誕生日会に来てくれる。」って。リヤンちゃんは、うれしそうだった。

ありがとう。沢田先生。

〈沢田美喜さんの略歴〉

一九〇一年 岩崎久弥（岩崎弥太郎の長男）の長女として東京に生まれる。

一九二二年 沢田廉三（外交官）と結婚

一九四八年 エリザベスサンダースホーム創立

一九六〇年 エリザベス・ブラックウエル賞受賞（この賞は、全世界の婦人の中から人道主義に貢献した人に与えられるもので、沢田美喜は三人目の受賞者）

一九六七年 ブラジル、アメリカの卒園生訪問

一九八〇年 七八歳で永眠

3 愛の日記

4-(3) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。(公正公平、正義)

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

人はだれも大切にされ認められる存在として、よりよく生きようとしている。ところが、毎日の生活の中で、ややもすると相手の気持ちを理解しようとしないうつ動が見られたり、そのことが見過ごされたりして、種々の問題を生じさせている。したがって、よりよい社会生活を営むには、人はだれでも大切にされるという考えを基本に、差別をしたり偏見をもったりしないように自覚し、努力していくことが大切である。

〈子どもの実態について〉

高学年ともなると相手の気持ちを共感的に捉え、その心情を思いやることもできる。また、友達に対して自分はどうのように接するべきか判断する力も育ってきている。そして、そのように行動できる自分でありたいと願っている。だが、友達関係などに思いをめぐらせ、自分はどうのように思われるかと考えすぎて、実践化できないことが多い。学習を通し、互いによりよい

人間関係を築いていきたいという同じ願いをもつ仲間であることを分かり合うことが、実践力を高めることにもつながると考える。

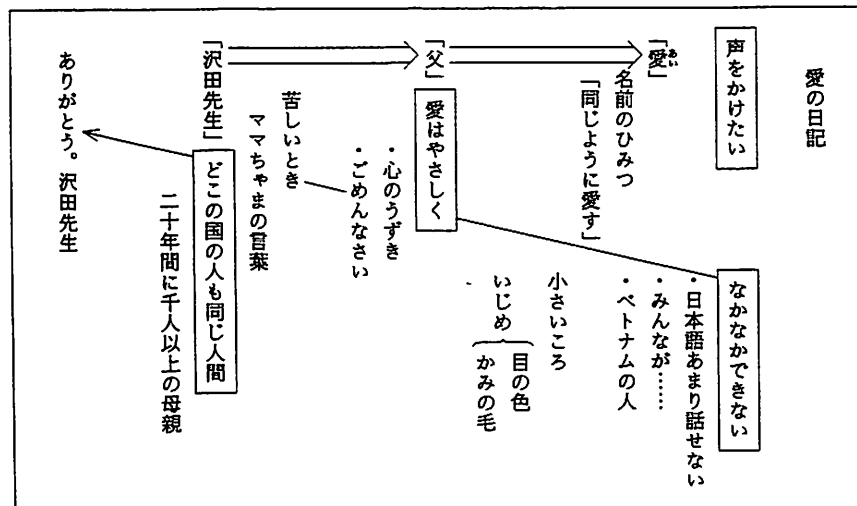
〈資料について〉

主人公の愛は、父が育ったエリザベスサンダースホームへ行く。ホームで、父が小さい頃いじめられたことや沢田先生の話を聞く。そして、沢田先生の、すべての子どもが人間らしく生きられるようにという願いや、人間愛に触れることによって、自分の身近にある級友への差別の問題を自分の課題として受けとめるという内容である。愛の気持ちに共感させながら、子どもたち自身の中にもある人間の強さ、弱さについて見つめ直すことができるよう支援していきたい。

また、事前に学級内でいじめ、仲間はずれなどの問題がないかを話し合っておくことで、よりねらいにせまることができると考える。

2 ねらい

だれに対しても、心のこもった言動で、公正公平に接しようとする態度を養う。



□板書

3 展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) つらい思いをしている友達に、これまでどのように接してきたか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なかなか声をかけられなかった。 ・ 励ましてあげたり、助けになろうとした。 <p>(2) 資料「愛の日記」を読んで話し合う。</p> <p>① リャンちゃんがさびしそうにしているのを見た時、愛はどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話しかけてあげたい。 ・ 日本語も通じないし、みんなも話しかけないから、話しかけられない。 <p>② 父の小さいころの話を聞き、愛はどんな気持ちになり、どのようなことを思ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 父のいじめられた話を聞いて悲しかった。 ・ 目や髪の色が違うことでいじめられた父は、今のリャンちゃんと同じだ。 ・ 声をかけられないでいる私はなさない。 <p>③ 沢田先生の言葉や行動は、愛にどのようなことを考えさせたでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 沢田先生のように、自分もみんな同じように愛せる人になりたい。 ・ 沢田先生は、みんなのことを自分のことのように思い、多くの人の生きる支えとなってきた。 ・ 自分も勇気を出して声をかけてみよう。 <p>(3) 学習をこれからの生活にどのように生かしていくか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今日学習したことを、これからの生活にどのように生かしていきたいと思いますか。 <p>(4) 自分の決意をカードに絵や短文で表現する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの生活に目を向けながら、ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 ・ 話しかけないという行為の中に、ベトナムの人だから、言葉が通じない人だからという偏見があることに気付くことができるように助言する。 ・ 学級の問題に対する自分自身のかかわり方に、心を痛める主人公の思いを共感的に捉えることができるようにする。 ・ 先生の間人愛や父の思いにふれ、愛が自分自身の生き方を見つめ直し、リャンちゃんへのかかわりを反省し、だれに対しても公正公平にすることの大切さをつかみとっていった過程を捉えることができるようにする。 ・ 思い切って声をかけられた愛の喜びや、自分自身の体験とも重ね合わせて、自分なりの課題をきちんとつとめることができるよう支援する。 ・ その子なりのよさを認め、表現作品にこめられた思いを共有し合うことができるようにする。